

注意欠陥・多動性障害児に対する音楽療法

野 尻 恵美子

(2004年1月20日受理)

I. はじめに

注意欠陥・多動性障害は、DSM-IVにある診断名であり、日常行動の中で特徴となる症状がみられるかどうかという点で診断される症候群である。気が散りやすく一つのことに集中できず、落ち着きなく動きまわるといのが大きな特徴である。「7歳以前に発症し、『不注意』『多動性』『衝動性』の面での特徴をもち、それによって集団や家庭のなかで、あるいは友だち関係において不適応を起こしており、まわりも本人も困り、生活上なんらかの援助が必要なケース」と言い換えることができる。¹⁾ 直接的な原因は不明であり、親の育て方やしつけの悪さにより起こるものではなく、何らかの中樞神経機能障害が背景にあると推測される。

音楽は人間の機能としては、聴覚系と深く結びついており、脳を中心とする身体的機能と密接な関係を持っている。さらに音楽活動をするという水準では、触覚、視覚、運動系との協調が必要になり、統合的心身活動が求められる。このことは人間の精神身体が発達にとって、音楽が重要な役割を果たしているということであり、発達促進的なアプローチに音楽活動が導入される意義でもある。障害児は、欲求情動を適応的に発散することが苦手な者が多いが、音楽は彼らのなかに押し込められている欲求情動をうまく発散する機会を提供することになる。つまり問題行動に含まれている欲求や情動を、問題行動として表面化している行動に最も近い音楽活動に移し変えていくことが可能である。暴力的な行為が見られる場合は、攻撃性の発散に適した楽器や運動を提供して発散さ

せることを試み、発散できる方法を獲得したら次の段階としてそれを一定の音楽的秩序のなかにコントロールすることを学習させるという方法で、行動を適応的に変えていくのである。このように日常生活における問題行動の背景にある情動を音楽活動に移し変えることが障害児への音楽療法の大きな意義であるといえる。

II. 目 的

対象児はADHDの診断を受けているが、最も目立った問題行動として攻撃的、破壊的行動があげられた。また中程度の知的障害も併せ持っていた。そのため音楽療法のなかでその問題行動をいかに適応的な音楽活動に移し変え、日常生活の中での攻撃的、破壊的活動を減少させていったかを分析、検討することを本研究の目的とする。

さらに治療仮説として「音楽は発散的であり、情動の直接的発散をもたらす方法を提供する」という音楽の特性が適応的な音楽活動への移行を可能にし、「音楽は一定の法則性の上に構造化されている」という特性を利用して、音楽活動を行うことにより秩序形成を促し、認知機能の発達を促進させることが可能であると考えられた。

III. 方 法

① 対象児について

対象児は平成6年生まれの男児であり、治療開始時は特殊学級の2年生であった。ADHDと知的障害を併せ持っていた。家族構成は父、母、兄2人、姉1人、妹1人であり、治療期間中にさらに下の子が生まれた。

日常生活に関しては時々失敗もするがほぼ自律

していた。交流状況は、言語は出るがはっきりせず、同じことを何度も繰り返したり、おうむ返しであることが見られ、その内容も意味の通じないが多かった。意味のある会話としては、対象児が自分の要求を「～ほしい」と二語文で伝えることは可能であった。またセラピスト（以下 Th）の指示も二語文程度であれば理解できた。

認知機能の発達状況は、Th、コワーカー（以下 Cw）のことは正確に認知していた。文字は書くとしなかったが、自分の名前などの特定の字は読むことが出来た。楽器の操作はたたく楽器であれば操作することは可能であった。秩序形成に関しては、Thが指示をしても椅子に座ろうとはしなかった。

運動機能の発達状況には遅れはなかった。しかし高いところを好み、セッション中ピアノの上にあがり、なかなか降りてこないことが多かった。行動特性は、治療開始時とはにかく Th や母に対しての暴力行為や破壊的な行動が目立った。その反面、Th に抱きつく行動も好んでいた。また高いところを好むという特性もあった。破壊行動としては楽器などを天井に投げることやピアノのハンマーを次々と折ってしまうことがあった。Th が制止してもおさまらず、無理に止めさせようとするとさらに激しく暴れた。その他狭いところを好み、学校では対象児が暴れている際、毛布などで包むと落ち着くとのことであった。OT からの情報でも触覚刺激を好むとのことであった。医師から処方された薬剤を使用しており、症状によって服用する量を変更している。

② 治療構造

期 間：

平成13年9月～15年12月 現在継続中

頻 度：

週1回40分の個人セッション 計58回実施

場 所：

仁愛女子短期大学音楽館

人的構造：

Th 1 名、Cw の参加は対象児の発達段階や短期目標に応じてその都度判断した S1～3 は Cw 参加、S4～12 は Th のみ、S13～50 は Cw 参加、S51からは Th のみで行った

母親も S5 までは入室したがその後は Th の判断で入室していない

③ 長期目標

暴力的、破壊的行動の減少

認知機能の発達を促進させる

IV. 経過と結果

治療過程の中で対象児の変化に伴い、四つの期間に分けて治療経過および結果を記述する。

第一期 短期目標

Th との治療関係の樹立

S1～S12

この時期は、Th との治療関係の樹立を目標とし、Th が対象児にとって欲求充足の対象となるように、対象児の好む活動を見つけるため様々な楽器や遊具を置き、Cw と母も同室させセッションを行った。この時期の初期のセッションでは、セッションを行う部屋に入るのを嫌がり入室前から泣き叫び、母に対して蹴るなどの暴力行為が多く見られた。また楽器や遊具を投げたり倒したりすることも多かった。特に母が退室した際には、椅子や机なども倒し、大声をあげて暴力的、破壊的行動が激しかった。Th は音楽活動を行うことで対象児の破壊的エネルギーを適応的に発散させようと考え、打楽器を好きなようにたたかせようと試みたが対象児は音楽活動には興味を示さなかった。Th は対象児が行動を抑制されることなく自由に遊ぶことの出来る空間を提供するため、投げられるものを撤去し、トランポリンとビーチボールのみを置き、刺激を最小限に抑えるため Cw も参加しない治療構造に変化させた。また母親も入室しないで行うことにした。行った活動はトランポリン、Th とのキャッチボール、ボーリングであり、やはり音楽活動には興味を示さなかった。対象児の行動特性としてピアノの上にあがるなど、高いところを好むことがあげられた。そのピアノのハンマーを次々に折るという破壊活動が激しくなったのでさらにピアノも撤去し、壊れないキーボードに変更した。対象児は触覚刺激を好み、セッション中布に包まったりトランポリンを跳ぶ際手をつないでいる Th に抱きつくなどの行動も多く見られた。

先に述べたように第一期ではほとんど音楽活動

は行わなかったが、セッションを進めるうちに「かえるの歌」の歌詞を変えて作った「トランポリンの歌」は覚えてよく歌うことが見られた。また「ぶんぶんぶん」も歌うようになった。しかし学校では対象児が歌を歌うことはまったく見られないとのことであった。暴力的、破壊的行動のほかの問題行動としてつば吐きと、対象児が自分の手を噛むという自傷行為があった。その際対象児の好む活動を提供するとおさまることから自分のエネルギーを思うように発散できないときに見られるということが推測された。また思いっきり壁を蹴ることもあったが、それはトランポリンを跳ぶことで適応的な活動に変えていくことは出来た。

このように Th が対象児の行動を制限することなく受容することにより、対象児は Th を欲求充足の対象であると認知し、治療関係が樹立していった。それに伴い対象児の暴力的行動も減少していった。第一期の薬剤の服用量は、朝リタリン 8mg、午後リタリン 5mg であった。

第二期 短期目標

音楽活動によって情動を発散させる S13～S27

第一期の Th のみとの関わりの中の自由構造において治療関係は樹立され、それと共に破壊行動も減少した。そのため対象児の発達段階に応じて音楽活動を取り入れ適応的に発散させることを目標に置いた。また秩序形成の促進と認知機能の発達のため、自由構造から課題設定の構造に変化させていった。そして Cw も参加させた。Cw が入ることで Th に対する抱きつき行動が減少した。これは他人の視線を意識してのことであると考えられた。一方で第一期から続いていたつば吐きが、明らかに Th に向けて行われるようになり、回数も増加した。対象児は Cw に対する関心も見られ、Cw がいないセッションの際「おねえさんは」と何度も Th に質問することが見られた。

行った主な活動は、対象児の好むトランポリン、キャッチボールを中心に打楽器のリズム打ちを取り入れたプログラムを組んだ。打楽器はシンバルを使用し、同質技法を用い、対象児に好きなようにたたかせることを行った。対象児は以前のようにバチを投げることもなく思いっきりたたいた。特にシンバルは響いた大きな音が出るため、発散

させることを目的とした楽器として適していたと考えられ、対象児は好んでたたいた。またこの時期は秩序形成のため、セッションの中で椅子に座らせる時間を作ろうと考えた。対象児は入室時にアルバムや本などを持参していることが多かった。Th が活動の妨げになるためセッションが終わるまで預かろうとしても嫌がり、いつまでも床で見ていたことがあった。そこで椅子に座って机の上で見るように指示をするとそれに従い、一定の時間机に向かい椅子に座ることが可能になった。また始まりと終わりの歌の際も椅子に座って行うことが出来るようになり、帰りたいとなると対象児から終わりの歌を歌うようになった。このような呼びかけ技法の使用で音楽と行動の一致が出来るようになり、秩序形成や認知機能が発達したと考えられる。第二期に入り、対象児の破壊的行動は減少していたが、S21に小楽器を天井に投げつけ電気を壊すということがあった。その際 Th は「～くんが壊したんだよ。だめでしょ」と対象児にその行動が悪いことであることを言語で伝えた。対象児は自分が悪いことをしたことを認知しており、次のセッションの際も壊れた電気のことを気にしていた。

打楽器の活動は対象児が好きなようにたたくことから Th のピアノに合わせて一定のリズムでたたく活動に水準を上げていった。この時期の対象児は曲の開始と終了は認知できておらず、ピアノが終わっても打楽器をたたきつづけることが見られた。しかし一定の時間であれば対象児の決めたテンポでたたけるようになった。これらの活動も対象児の秩序形成、認知機能の発達を促したと考えられる。

以上のように第二期では音楽活動を取り入れ、課題を設定してセッションを行った。その過程で対象児は徐々に Th の言語の指示に従えるようになり、Th に対するつば吐きや物を投げる行動も減少していった。この時期の薬剤の服用量は、朝リタリン 8mg、午後リスパダール 1mg になり、第一期に比べ、服用量が減少した。

第三期 短期目標

引き続き音楽による情動の発散 S28～S50

第三期では第二期で暴力的、破壊的行動が減少

し、音楽活動が行えるようになったため引き続き Cw を入室させ様々な楽器も置いてセッションを行った。この時期の初期はやはり対象児が本や絵の具を持参していたが、セッションの妨げになるという母親の判断で入室前に取り上げられることがあった。すると再び泣いたり、楽器を投げるなどの暴力行為が激しくなった。この時期に行った主な活動は「アンパンマン」などのキャラクターのパズル、トランポリン、描画、たいこのリズム打ちであった。しかし活動の最中に Th や Cw に対してつばを吐いたり、殴る蹴るなどの暴力行動や、置いてある楽器やクレヨンを投げるなどの破壊活動が激しくなった。そのような行動を行っている対象児は非常に興奮していることが多かった。そのため再度、投げると危険なものは部屋に置かずにたいこもパチ無しで素手でたたかせるようになった。Th はそのような暴力的、破壊的行動が悪いことであることを対象児に認知させるためにすでに治療関係が樹立され、対象児と Th との間で信頼関係が成立していると判断したため、Th に向かってつば吐きが出来ないように対象児の頭を押さえたり、物を投げた対象児の手を強く握るなどの行動による制止を行った。すると反対に対象児は Th のそれらの行動を喜び、わざと物を投げ Th に自分から手を差し出し、その手を強く握るよう要求した。また物を投げた後で対象児が自分で「だめ」と言って Th が制止する言葉を発することもあった。このように対象児はそれらの行動が悪いことであると認知したうえで、Th の関心を自分に向けさせるための手段として暴力的、破壊的行動を行っているとは推測された。このことは同じ暴力行動でも第一期に起こっていたものとは性質が異なっていた。Th の制止行動が対象児にとって問題行動を強化させる要因となっていたと考えたため、対象児の問題行動に対して Th はあえてそのことを指摘せず、無視をするという対応に切り替えた。すると対象児にとってそのような行動が意味を持たないものとなり次第に Th に対する暴力行為が減少した。また対象児が机や椅子などを投げて暴れた際には、Th と Cw が部屋の外に出て対象児をしばらく一人にさせた。すると対象児はしばらくはそれらを投げてい

たが、じきに静かになって一人で遊んでいた。さらに描画活動の際に対象児が机に落書きをすることも見られた。やはり対象児は Th に怒られることを望んでおり、自分で「あーあ」と言い、Th の反応をうかがっていた。そこで Th は落書きをしたことには言語で反応せずに机を外に出し没収するということで対応した。対象児に机がなくなると不自由であり、落書きがいけないことであることを認知させることが目的であった。このような Th の反応により対象児の暴力的、破壊的行動は再び減少していった。特に対象児は一人にされることを嫌がり、問題行動の後出て行こうとする Th に抱きつくことが見られた。

以上のような「計画的無視による消去」と「タイムアウト法」は対象児の問題行動を減少させるために効果的であった。しかしそれは第一期、第二期を通して Th と対象児の間で信頼関係が確実に成立され、対象児にとって Th が自分を受容してくれる相手であると認知していたために使用が可能であったと考えられる。

そのような中でこの時期に行った音楽活動はピアノが鳴っている間だけトランポリンを跳んだり、たいこをたたくという活動であった。対象児はやはり曲の始まりと終わりの認知は出来ていなかった。そのためさらに分かりやすく、曲が止まったら椅子に座り、曲が始まったら歩く活動も取り入れた。Th がモデリングを行うと次第に出来るようになっていき、対象児は徐々に音に関心を向け曲の始まりと終わりを認知するようになった。そして第三期の終わりになると問題行動はなくなり椅子に座り活動に集中できるようになった。また顔を描かせると正確ではないが目、鼻、口をイメージして描けるようになった。この時期の薬剤の使用量は、初めは第二期と同じで、朝リタリン 8mg、午後リスパダール 1mgであったが、S38からは朝リスパダール 1mg、午後もしスバダール 1mgとなり、更に使用量が減少した。

第四期 短期目標

認知機能の発達

S51～S58

第三期で激しかった対象児の問題行動が減少し、集中して活動を行うことが可能となったため、この時期では音楽活動を行うことで認知機能の発

達を促すことを目標にあげた。第三期では Cw が入室していても Th の指示で活動出来るようになっていたが、学校では先生と一対一で指導を受けるほうが集中出来るとのことであった。そこで再び治療構造を変化させ、Th と対象児のみのセッションにした。行った主な活動は、パズル、トランボリン、たいこのリズム打ち、Th の動作を模倣する活動であった。パズルは文字や数字の学習のためキャラクターのパズルではなくひらがなと数字のパズルに切り替えた。これは対象児が好んでいることもあって集中して机に向かう時間を作ることを目的に取り入れた。初めはパズルが途中で歩き回ることがあったが、次第に終わるまで座っていられるようになった。たいこのリズム打ちでは、まず Th がピアノで演奏する曲が始まったたたき、終わったら止めることを行い、対象児の発達段階に合わせ、曲の途中で Th がピアノを止めて、それに合わせて対象児もたいこを止めるという活動へと水準を上げていった。これは対象児にとって適応水準を上回る活動であったが、回数をこなすうちに Th の音を聴くようになり可能となった。それに伴い対象児は音楽そのものに関心を持ち始め、弾いて欲しい曲を自分から Th にリクエストするようになった。そしてシンバルを自分から選ぶなど、好きな楽器を対象児自ら取りに行くことも見られるようになった。Th の動作を模倣する活動は対象児がリクエストした「大きな栗の木の下で」を用い、Th と同じ動きをするように指示をした。これはなかなか困難であり、正確に模倣は出来ないが徐々に可能となった。対象児に物の大きさを認知させるため、「小さな栗の～」の部分では動作を小さくしたり、たいこのリズムうちの際、Th が弾くピアノの強弱に合わせて対象児も音の強さをコントロールする活動を取り入れた。この課題はまだ達成できておらず、小さな動きは不可能であり、たいこは常に思いっきりたたいている状態である。物の大きさを認知することや、強弱を判断して力をコントロールすることは認知機能の発達につながり、今後の課題となっている。この時期では、対象児が歌を歌うことも多く、自分でリクエストした曲をたいこをたたきながら歌うことも見られている。対象児にと

って週に一回のセッションの時間はとても楽しみになっており、対象児が楽しみながら認知機能を発達させる場となっていると考えられる。

第四期では Th のみとの関わりの中で対象児はより集中して Th の指示に従うことが出来るようになった。そしてうろうろと落ち着きなく部屋を歩き回ることもなくなり、始まりと終わりの歌を正しく歌えるようになるなど、音楽活動を通して認知機能の発達を促すことが出来た。この時期の薬剤の服用量は、第三期と同様であった。

V. 考 察

以上の治療経過の中で、まず第一期において Th が対象児の暴力的、破壊的行動を制限することなく完全に受容することにより対象児にとって Th が信頼できる相手であると認知させたことが重要であったと考えられる。

ウィニコットは対象を求めることについて考察している。「反社会的な患者は、より信頼できる環境かどうかを感知し、その安定性や安全性の質を絶えず試しては再点検するのである。一略一早期に環境の失敗を体験したほとんどすべての患者は、その状況が信頼できる様相を与えているか否か、それは本当に信頼できるか否かについて、見とどけて試すために長い治療期間を費やさねばならない。確かに、治療者がどんな人であるか、その人がどのような種類の訓練を受けてきたのかは、ここではきわめて重要である。患者は自分が落っことされたいということを実質的に保証してくれる抱える環境を治療者が提供できていると感じるまでは、本当の構造的な退行に自分が入っていくことはできないであろう。」²⁾とある。特に Th との一対一の治療構造は、対象児に安心感と Th に対する信頼感を与えることに効果的であった。そのため第一期において Th のみとの関わりの中で治療関係を樹立させることが出来、第二期、第三期において音楽活動によって発散させるという治療目標を達成させることが出来た。第三期では対象児の問題行動が再度激しくなり、発達水準が以前の段階に逆戻りしたかの印象であった。これは音楽活動を行うことで対象児が退行したと考えられ、それにより緊張感を取り除き、抑圧して

いた情動が表面化したのだと推測される。また「ウィニコットにおける発達とは、実際は直線的ではなく、らせん状に展開していく。前進はほとんどいつも一時的な退行をとめない、その退行は病的なものではなく、休息場所を提供するという、たとえば、Mahler とその同僚が述べた再接近期に組み込まれるホームベースに戻るといったもの」³⁾であるため、第三期は、次の第四期に対象児の秩序形成能力や目標に上げた認知機能が発達するための過渡期であったとも考えられる。第三期に起きた対象児の問題行動に対して Th は、「計画的無視による消去」と「タイムアウト法」を用いて対応した。これらは困った行動を減らすための技法であり、「適応的な行動と同じように困った行動も子どもが偶然学習し獲得したもの」という立場をとる。問題行動を少なくするには、行動が生じてその後で強化となるような事柄が起きないようにする。行動が起こっても強化されないためこれを消去とよぶ。⁴⁾ものである。先に述べたように第一期において治療関係が樹立し、対象児が Th に対して信頼感を持つことが出来ていたために Th はこれらの技法が使用可能であると判断し、それにより問題行動の減少を促すことにつながった。言い換えれば、対象児は Th に対し、「対人安全保障感」を持っていたと考えられる。これはサリヴァンの「対人関係論」で述べられており、「サリヴァンはヒトが追求する目的を、生物的な食欲、睡眠欲といった『満足欲求』、心理的・社会的な『対人安全保障感』とに分けた。無力なままこの世に生を受けるヒトにとり、その生存のいかんは、周囲の『重要人物』の態度にこそかかってくる。周囲の『重要人物』を相手とする『安全保障感獲得作戦』の成否が、後年の種々の心的破綻に関係してくることとなる。」⁵⁾としている。対象児がThの関心を自分に向けさせるための手段として問題行動を行ったが、それらの行動では対象児の欲求を満たすことは出来ないと認知させた。そして再び第四期で Th と対象児の一对一の治療構造にして対象児を受容しながら認知機能の発達を目指した。

今回の治療においての音楽の使用方法をまとめると、まず対象児の破壊的エネルギーを音楽活動

によって適応的に発散させるため、対象児に打楽器をたたかせた。ここではあえてリズムやテンポなどを指示せずに、対象児の自由な表現を受容した。次に対象児の発達段階に応じて、対象児に一定の秩序を内在化させるために音楽の持つ法則性を利用して Th が指示した方法でたたく活動に段階をあげていった。これにより音楽活動を行うことで対象児の認知機能の発達を促すことが出来た。このように音楽は感覚運動段階の原始的水準から抽象的思考様式の段階まで、様々な段階の認知機能に対応する活動を提供することが出来るため、対象児がどのような発達水準にあっても、音楽療法は発達を促進させる技法として効果的なものである。また治療過程の中で、対象児が服用した薬剤の量が減少していった。このことから音楽療法が対象児にとって有効であったと推測される。

本対象児に対する治療は、対象児の特性として破壊的暴力的行動が最も目立っており、そのエネルギーが Th に向かったということもあり、Th としては身体的にも精神的にも忍耐を要するものであった。しかしこれらの対象児の行動は発達過程において意義のあるものであり、それを受け止める必要があった。「よきウィニコット学派の治療者は『破壊される』用意がなされていなければならない。ここに付け加えられることは、打ち倒されるがいかならない治療者の重要性についてである。そのような治療者は、発生期にあり、最終的には十分に発達する、建設的で修復的な患者の活動を認めることができる。— 略 —もし思いやりの能力に関する適度な発達ラインが治療状況で再現されれば、たとえこの感情が最初に患者の偽りの自己によって以前は表されていたとしても、真の思いやりの能力を創造することがときに可能である」⁶⁾からである。

本セッションは今後も継続するが、次の課題としては引き続き認知機能の発達があげられる。特に対象児は表現力が乏しいため、象徴機能の発達と、自分の気持ちを言語化できる能力の発達を目指していこうと考えている。

引用文献

- 1) 4) 蘭、長野他編 障害特性の理解と発達援助 ナカ

ニシヤ出版 P.156、P.80 2001

- 2) 3) 6) サイモン・A・グロールニック 野中他訳 ウ
イニコット入門 岩崎学術出版社 P.75～76、P24、
P8 2001
- 5) 氏原、小川他共編 心理臨床大事典 培風館 P.149
2000

参考文献

小此木啓吾 現代の精神分析 講談社学術文庫 2002
D・Wウイニコット 牛島訳 情緒発達の精神分析理論
岩崎学術出版社 2002